

## Part 3

# 調整仕訳は3パターン IFRSと 会計システムとの関係

## この章のポイント

● 連結財務諸表作成は業務システムから始まり、会計システム(G/L)情報に集計され、連結会計システムを通過して作成される。

● IFRSに必要な調整仕訳を入れるパターンは、次の①～③に区分される。

パターン①…業務システムにおいてIFRS調整仕訳を入れる

パターン②…会計システム(G/L)にIFRS調整仕訳を入れる

パターン③…連結システムに連携統合される際にIFRS調整仕訳を入れる

## IFRSとシステムとの関係

### (1) 会計システムの流れ

続いて、IFRS導入の要件がシステムに与える影響を検討する。まずは財務諸表が作成される基本的な会計システムの流れをおさらいしておく。

企業の主要な業務活動である購買・生産・販売などには、それぞれの会計情報に付随する各業務システム(ERPの場合はモジュールともいう)が存在する。この業務システムにおいて日々の購買・生産・販売といった業務活動が記録されていき、そのなかで会計情報に関連するもののみ「会計システム」として、帳簿情報(General Ledger:G/L)としてプールされていく。

購買活動の例を挙げれば、日々の見積り、発注、検収、出金といった業務活動を購買システムという業務システムで管理する。一方で、会計帳簿では、検収時点であれば在庫や仕入債務を計上せねばならず、また出金時点であれば債務を消し込まないといけない。このように、業務活動は業務システムの領域だが、そのなかで会計情報に関連する情報が会計システムにも記録されていくという関係である。

このように、通常の業務では、会計情報に影響を与える項目について、業務システムを経由して日々、会計システムに仕訳が集計されていく。日々の業務であれば、ほとんどがこの流れで会計システムに、仕訳形式で保存されていく。

一方で業務システムを経由しない取引、とりわけ業務活動以外の取引は、会計システムへ直接、振替伝票

が集計され、最終的な会計情報ができあがっていく。

日々の帳簿記録はこのように集積され、その帳簿データを残高で示したものが、財務諸表のデータとなり、単体財務諸表の元である帳簿となる。

さらに、連結財務諸表作成企業においては、個社の財務諸表の残高データを連結会計システムに連携・集約させていき、各グループ会社の財務諸表を単純合算する。単純合算されたデータは連結会計システムにおいて、資本連結、成果連結の仕訳が計上されていき、そのできたデータが開示システムに流しこまれ、有価証券報告書や会社法計算書類ができあがっていく。図表8は財務諸表を作成するための大まかな流れである。

### (2) IFRSとシステムの関係

財務諸表作成の流れは業務システムから始まり、会計システム(G/L)情報に集計され、連結会計システムを通過して開示システムに入っていく。IFRSを導入した場合も、基本的にこの流れは変わらない。

このため、IFRSに必要な調整仕訳は、次の①～③の工程のいずれ